宮本常一の瀬戸内海へのまなざし

野　間　晴　雄

1．はじめに

前稿（野間 2017）では，前半生をジャーナリストとして，後半生は国会議員として瀬戸内海の国立公園化に奔走した小西和（かなう）（1873-1947）の瀬戸内海論について，その主著『瀬戸内海論』（1910）の内容・書誌事項について基礎的な考察を行った。本稿はそれに続いて，昭和戦前期から高度経済成長期までの瀬戸内海のほぼすべての島嶼やその周辺地域をくまなく歩いて膨大な記録を残した在野の民俗学者であり，かつ，むらおこしの実践家でもあった宮本常一（1907-1981）の瀬戸内海島嶼論を論じたい。かれが唯一「自分の意志で書いた書物」といわしめた『瀬戸内海の研究―島嶼の開発とその社会形成：海人の定住を中心に―』（1965）を中心に，そこにいたるまでのこの地域への旅や著作，この大著以降のこの地域への新たな沈潜と雄大な構想への挑戦について論じてみたい。表１はこの700ページを超える大著の章構成である。

まず，この本は宮本がこれまで書いてきた，そのときどきの求めに応じて瀬戸内海の島嶼に関するさまざまな文章・民俗誌などをもとにしながらも，すべてをまったく新たに筆を起こしたものである。その出発点は『周防大島を中心としたる海の生活誌』（1936）であるという。

71歳晩年に書いた自伝『民俗学の旅』（1978）ではこう記している。

> 東京でアチック・ミューゼアムに泊まっていたある夜，渋沢先生からアチックは水産史の研究をしている者が多いが，具体的に漁村というのはどういうものか，どのような構造を持ち，どんな生活をしているのかという

表1　『瀬戸内海の研究』（1965）の章構成

章　構　成	ページ
第一編　総論	9
1）生産様式と島の景観	11
2）文献と現地状況	23
3）島嶼生活の矛盾	
第二編　島の生産類型と社会的変遷―島の中世的社会―	
1．小島の利用	55
2．海人とその定住	101
3．大三島―海人定住とその変遷	122
4．周防大島―水田と畑作	143
5．淡路島―水田村と漁村	183
6．忽那諸島―畑作と漁村	230
7．上ゲ浜塩田と島	270
8．海賊の系譜	314
9．守護方警固衆	407
第三編　近世への展開	457
0．近世化の意味	459
1．島における庄屋の意義	461
2．島嶼船着場集落の形成	530
3．土地均分	556
4．舸子浦と漁業権	622
5．漁浦の発展	674
結語	710
あとがき	713
索引	1～22
付録　写真15葉　地図6葉＋別冊　付表10　系図7　参考資料6	

ことについて具体的にわかっているものが少ない。君は海岸育ちだから漁村の具体的な生活史を書いてみてくれないか」と言われた。私の村は海岸にあるけれども漁村ではない。しかし網もひき，魚も釣り，貝も掘ってきた。海岸に生きている人びとがどのような生活を立ててきたかについては多くの見聞と体験がある。それを書いてみようと思って夏休みに郷里へ帰り，家の沖の島や，大島の南側の小さな島々も歩いた。その頃は話はいくらでも聞くことができたし，人々は親切であった。その秋頃から執筆にかかって，昭和11年1月すぎには一冊にまとめることができた。そして11年の夏には『周防大島を中心としたる海の生活誌』と題してアチック・

ミューゼアムから刊行していただいた。私の最初のまとまった書物であった（宮本 1993：92）

宮本の瀬戸内海地域のまとまった研究は郷里の周防大島の民俗誌から始まる。ここで，郷里は漁村ではないが，海岸に面した村落であること，それは農業を主体とする村ながら魚もたまには海でとり，貝も拾い食べる，海の資源にも生活が密着していた海村であったことを明言している。宮本29歳，1937（昭和12）年の記録である。

２．宮本常一の略歴と瀬戸内海島嶼調査の足跡

その後の宮本による日本各地の調査については，佐野眞一の人口に膾炙した著作（佐野 1996，2003）をはじめ多くの評伝があるし，宮本自身も『民俗学への道』（1955），『民俗学への旅』（1978）で，歩んできた道程を詳しくかつ平易に語りかけるように記している。

ここでは簡単に宮本の略歴をたどるにとどめたい。ただ，表２には瀬戸内海に関わる宮本のかかわりをやや詳しくした年表を作成したので参考にされたい。とくに宮本のエピソードについては，宮本に師事し，今も刊行が続く『宮本常一著作集』（未來社）をはじめ多くの著作集の編集をしてきて田村善・武蔵野美術大学名誉教授による追悼文集の続編に所収された「宮本常一略年譜」を参考に加筆した。

宮本常一は山口県大島郡家室西方村大字西方（現在の周防大島町，旧東和町[1)]）の農家に1907（明治40）年生まれ，地元の小学校高等科を卒業後，大阪に出て郵便局で働く。その間の猛勉強ぶりは「叔父の家を出て桜ノ宮に下宿，１月にして釣鐘町に移る，日給１円，部屋代10円，電灯代50銭，朝食15銭，昼20銭，晩20銭。１日２食にして本を読む。７時間勉強５時間睡眠を実行する」（田村 2004：3）でわかる。その傍ら，1926（大正15）年，天王寺師範学校二

部を受験し合格，地理，歴史を学ぶ。1年で卒業後は，「東京高師の受験は失敗するも在京中恩師の金子の紹介で親友大宅壮一を新潮社に訪ね，その鋭い観察眼に敬服，大きな刺激を受け，1か月1万ページ読破の読書計画をたて約3年にわたって実行する。」（田村 2004：3）。自然主義文学にも親しむたいへんな読書家，ロマンチストであった。その後，大阪府泉南郡由有真香村の尋常小学校訓導，兵役ののち同師範の専攻科を受験（1928），地理を専攻する。その後，泉南郡田尻尋常小学校訓導となる。その間，1930（昭和5）年には『旅と伝説』1月号に「周防大島（1）」が掲載され，以降，周防大島の民間伝承を11回にわたり投稿した（田村 2004：4）。1931（昭和6）年に独自に『大島郡誌』執筆計画をたて脱稿している。柳田国男がこの時期に日本各地の郷土史家らに郷土の民俗にかかわるまとまった記録をまとめさせてそれを刊行する手助けをしていたのに呼応する。また，同年，宮本も『周防大島昔話集』をわずか9日間で整理して柳田に郵送している。

表2　宮本常一略年表

西暦	和暦	年齢	宮本常一に関する事項	宮本主要著作	宮本のエピソード（田村善次郎2004による）	日本の出来事
1907	明治40	0	周防大島（大島郡家室西方村）8月1日生まれる			
1908	明治41	1				
1909	明治42	2				
1910	明治43	3				韓国併合
1911	明治44	4				
1912	明治45 大正1	5				清で辛亥革命，中華民国が樹立
1913	大正2	6				
1914	大正3	7	西方尋常小学校入学			第一次世界大戦（～17）
1915	大正4	8				対華21か条要求
1916	大正5	9				
1917	大正6	10				

1918	大正７	11				米騒動/ シベリア出兵
1919	大正８	12				
1920	大正９	13	西方尋常小学校卒業，高等科へ進学			
1921	大正10	14			国民中学講義録を購読，小西和『瀬戸内海論』を読む	渋沢敬三（25歳），邸内の屋根裏に化石標本，玩具展示，アチック・ミューゼアムソサエティと命名
1922	大正11	15	西方高等小学校卒業，農業手伝う			
1923	大正12	16	大阪へ，通信講習所入所			関東大震災（震災恐慌）
1924	大正13	17	大阪市高麗郵便局勤務		叔父の家を出て桜ノ宮に下宿，１月にして釣鐘町に移る，日給１円，部屋代10円，電灯代50銭，朝食15銭，昼20銭，晩20銭。１日２食にして本を読む。７時間勉強５時間睡眠を実行する。	
1925	大正14	18	高等文官試験受験，３科目合格			日ソ基本条約，ラジオ放送が開始/治安維持法
1926	大正15 昭和１	19	天王寺師範第二部入学，東京高等師範学校入試失敗，短期兵役		東京高師の受験は失敗するも在京中恩師の金子の紹介で親友大宅壮一を新潮社に訪ね，その鋭い観察眼に敬服，大きな刺激を受け，１か月１万ページ読破の読書計画をたて約３年にわたって実行する。	蒋介石率いる中国国民党（国民革命軍）が北伐を開始
1927	昭和２	20				昭和金融恐慌
1928	昭和３	21	天王寺師範専攻科入学（地理学）			世界恐慌
1929	昭和４	22	天王寺師範専攻科入学（地理学）卒業，泉南郡田尻小学校赴任			

1930	昭和5	23	肺結核で郷里で療養		『旅と伝伝説』1月号に「周防大島（1）」が掲載，以降民間伝承を11回にわたり投稿。	昭和恐慌
1931	昭和6	24			独自に『大島郡誌』執筆計画をたて脱稿。『周防大島昔話集』を9日間で整理して柳田に郵送	満州事変，国立公園法制定
1932	昭和7	25				
1933	昭和8	26	「口承文学」創刊			
1934	昭和9	27	京都大学に講義のため来京した柳田国男に会う，大阪民俗学会第1回会合を浜寺海の家で開催		京都大学に講義のため来京した柳田国男に会う	
1935	昭和10	28	渋沢敬三と大阪民俗談話会で初対面，玉田アサ子と結婚		渋沢から郷里の漁村民俗誌執筆をすすめられる	
1936	昭和11	29		『周防大島を中心とせる海の生活誌』アチック・ミューゼアム		二・二六事件
1937	昭和12	30	アチックの瀬戸内巡航に参加，長男千晴誕生			日中戦争，大東亜戦争
1938	昭和13	31				国家総動員法
1939	昭和14	32	取石小学校を辞してアチック入り，妻子は大阪におく			第二次世界大戦国民徴用令
1940	昭和15	33	満州建国大学助手への転職とりやめ			日独伊三国同盟紀元二千六百年記念行事
1941	昭和16	34			郷里の農具調査，淡路沼島調査	太平洋戦争
1942	昭和17	35		『民間暦』	胃潰瘍のため帰郷，百姓仕事従事，柱島（山口県）の地割調査，淡路由良のテグス調査	アチック・ミューゼアムが日本常民文化研究所と改名，大東亜共栄圏
1943	昭和18	36	保谷民族博物館所蔵民具調査，日本水産科学誌編纂	『家郷の訓』，『村里を行く』	日本常民文化研究所主任，月報100円，加俸50円	

1944	昭和19	37	奈良県郡山中学嘱託		西宮神社で大阪に戻った歓迎会開催	
1945	昭和20	38	大阪府農務部嘱託，堺の空襲で鳳の家を全焼，資料焼失/妻アサ子大島に帰郷		戦災による帰農者を引率して北海道にゆく	広島に原爆投下 終戦の詔勅（8月15日）
1946	昭和21	39	新自治協会嘱託として全国を講演，農業指導			公職追放 農地改革 日本国憲法公布
1947	昭和22	40	農業指導の傍ら全国の農村を歩く/大島民俗学会発足		農隙を利用して東北を主に全国を歩き，各地で農業技術，農業経営について講演，全国の篤農家と交流/渋沢敬三，宮本家に一泊	日本国憲法施行
1948	昭和23	41	大阪府農地部嘱託，農地解放，開拓地の農業指導，農業協同組合の育成にあたる	『愛情は子どもと共に』		
1949	昭和24	42	日本常民文化研究所復帰/水産庁委託の漁業制度資料保存事業による瀬戸内調査（52年まで）	『越前石徹白民俗誌』	農林省水産資料保存委員会嘱託，瀬戸内海の漁村調査，月手当3000円	
1950	昭和25	43	八学会連合による対馬調査	『ふるさとの生活』		朝鮮戦争（～53）/島嶼研究会発足（代表辻村太郎）
1951	昭和26	44	能登・対馬調査			サンフランシスコ平和条約
1952	昭和27	45	五島列島学術調査（経済史担当）/九学会連合能登調査（社会学班）/離島振興法制定に奔走		学際的共同調査を経験し，自らの調査・研究方法に自信を深める	
1953	昭和28	46	全国離島振興協議会幹事長，東京で病気療養（3年）	『日本の村』	全国離島振興協議会機関紙『しま』創刊	離島振興法制定成立（7月22日）/全国離島協議会
1954	昭和29	47	全国離島振興協議会初代事務局長/林業金融調査会設立，全国200の山村を歩く			原水爆禁止世界大会

1955	昭和30	48	日本常民文化研究所の「絵巻物による常民生活絵引」研究会再開，宮本は大半の粗稿を執筆	『民俗学への道』「歴史的展開過程より見たる国有林と地元の関係」		イタイイタイ病が発生（富山県神通川）
1956	昭和31	49				国際連合に加盟する
1957	昭和32	50		『風土記日本』平凡社（全7巻）刊行		
1958	昭和33	51		『中国風土記』		
1959	昭和34	52		『日本残酷物語』平凡社　編集・執筆，『海をひらいた人びと』，『日本の離島』	療養中で外出禁止の状態であったが，その間に「瀬戸内海島嶼の開発と社会形成」（学位論文）を執筆（9月～年末）	安保闘争，四日市ぜんそく発生
1960	昭和35	53		『忘れられた日本人』『日本の離島』	『日本の離島』でエッセイストクラブ賞受賞，中国文化賞（中国新聞社）受賞	日米安全保障条約を署名，安保闘争激化
1961	昭和36	54	東洋大学から「瀬戸内海の研究」で文学博士授与，渋沢邸から東京都府中に転居			農業基本法，ベトナム戦争（～75）
1962	昭和37	55	妻が上京，家族一緒の暮らし	『甘藷の歴史』，**「瀬戸内海文化の基盤」，民族学研究26-4**	柳田国男死去（88歳）	新産業都市法，工業整備特別地域推進法
1963	昭和38	56	『日本発見』創刊，九学会連合下北調査に参加	『開拓の歴史』	雑誌「デクノボウ」創刊	
1964	昭和39	57		『山に生きる人びと』『海に生きる人びと』『離島の旅』，大杉栄訳『相互扶助論を読んで』図書新聞，『民俗のふるさと』		東京五輪開催，東海道新幹線開通第二水俣病が発生する（新潟県阿賀野川）
1965	昭和40	58	武蔵野美術大学教授，生活文化研究会主宰	**『瀬戸内海の研究Ⅰ』未来社**，『民俗学のすすめ』『生業の推移』		

1966	昭和41	59	日本観光文化研究所開設，所長に就任	『村のなり立ち』		公害対策基本法公布 文化大革命（～77）
1967	昭和42	60	雑誌『あるくみるきく』創刊	『私の日本地図 3 下北半島』		大気汚染防止法公布 騒音規制法公布
1968	昭和43	61	広島県文化財専門委員として家船調査	『町のなり立ち』		
1969	昭和44	62	佐渡の八珍柿指導，田耕の鬼太鼓座に協力			新全国総合開発計画
1970	昭和45	63			田耕の「おんでこ（鬼太鼓）座」設立に協力	日本万国博覧会（大阪万博）
1971	昭和46	64	山村調査会理事			環境庁設置
1972	昭和47	65	日本生活学会理事			日本列島改造論/日中共同声明（国交回復）
1973	昭和48	66			日本観光文化研究所講義として「旅人たちの歴史」の連続講座開講	
1974	昭和49	67		『宝島民俗誌』		
1975	昭和50	68	初めて海外旅行でケニア，タンザニアへ			
1976	昭和51	69		『中国山地民族採訪録』		
1977	昭和52	70	武蔵野美術大学退職 今和次郎賞（日本生活学会）受賞		周防猿まわしの会に協力，済州島海女調査/愛媛大学での日本民族学会大会での記念講演「瀬戸内文化の系譜」	
1978	昭和53	71		『民俗学の旅』（自伝）		新東京国際空港（成田国際空港）開港
1979	昭和54	72	日本観光文化研究所で「日本文化の形成」講義	『民具学の提唱』		
1980	昭和55	73	周防大島に東和町郷土大学設立/中国を訪問	『旅人たちの歴史 野田泉光院』『旅人たちの歴史　菅江真澄』		

（各種資料より野間作成）

生涯の師，経済的な支援を受けた渋沢敬三とは，1935（昭和10）年に渋沢が第6回大阪民俗談話会[2)]に出席のため来阪した折が初対面である。その後，渋沢のすすめで小学校教員を辞して，妻子を大阪において，単身東京に向かう。渋沢のアチック・ミューゼアムに居候し，全国の民俗探訪や各種の調査に従事する。

> 渋沢先生を中心にしたアチック・ミューゼアムの研究員の一行が東瀬戸内海の島々をまわることになり，参加するようにお誘いをうけて多くの島々をまわって見ることができ深い感銘をおぼえた。そのとき，おなじように浮かんでいる島の一つ一つの性格がちがい，漁具漁法までまるで違っており，また漁業問題が色々絡んでいる事情を聞いた先生は「この複雑なものを解きほぐして体系を立ててみていくことはむずかしいことだが大変重要なことでもある。これは内海に住む人の手によってやるべきことで，君の生涯の仕事にやって見るとよいのではないか」と言われた。しかし貧しく非力な小学校の教師にそういうことはとうていできる仕事でもないと思ったが，なんとなくその言葉が心にひっかかった。考えてみれば瀬戸内海全体を体系的に見ようとするような書物はまだ出ていない。誰かがやっているのであろうけれども，私も私なりにやれるところまでやって見ようかとも考えてみるようになった。（宮本 1965：714）

すでに宮本は表1の1921年14歳の欄にあるように，10年前刊行された小西和の千ページにおよぶ大冊『瀬戸内論』（1911）を読破している。なんとも早熟で意志が高いことか。

私は前稿で，この書は瀬戸内という範囲を非常に柔軟・広義にとっていること，行政区画を無視して旧国や湾や海況をまたぐ水域などを重点的に扱っており，独自の地域区分をしていること，瀬戸内海の自然と総合的にとらえようとする意図が強く，地質，地形，土性，海洋や海底の状況，気象，動植物などを，

独自の主題図や海図，模式図，地形図の簡略化，さまざまな工夫された図表，ダイヤグラムを駆使しており，さらには絵画，写真，スケッチなどを加えて「風景」という用語で総合しようとしていること，その一方で，人文現象は「人生」いう言葉で扱われているが，自然現象との関連でその立地や分布が説明されているため，農業にかかわる風景などは意外と少ないことを指摘した（野間2017：175-176）。

つまり，宮本にとっては，この豪華本は必ず参照すべき必読書であったが，結論から言えばそれには満足しなかったといえよう。地を這うような個々のむらのさまざまな事象の総合的記述からはいった宮本にとって，小西の上から下へ，瀬戸内海とその周辺という柔軟な外枠（全体）と自然環境から地域区分していくと体系化の方法はなじめなかったのではないか。下から上へ積みあげながら体系化していく，それも瀬戸内海に浮かぶ島嶼の地域性，その島嶼のなかでの集落の性格の相違が宮本の出発点であった。まったく思考と総合の順序が小西とは正反対であった。それは演繹と帰納という方法論の相違とも言い換えることも可能であろう。何よりも宮本の『瀬戸内海の研究』は（一）という続編を想起させる番号が付され，かつ「島嶼の開発その社会形成―海人の定住を中心に―」というサブタイトルがついている。

> 渋沢先生も「完全をねらっていては生涯まとまらないから，まず第一巻をまとめるがよい」と言われるのでやっと秋風のたつころ筆を起こした私はものをまとめるとき一つのものを一気に仕上げないと駄目な性質なのである。あらゆる精力を集中しきらないとすまない。寝たりおきたりの中で，とにかく昭和34年２月には第一巻をまとめることができた（宮本：1965：718）。

しかし両著には共通点もある。さまざまな地域スケールの景観を重視したことである。それを小西は当時まだ貴重であった写真のみならず，自らの画才を

活かしたスケッチ，絵画などを多用した。宮本は，当時まだ庶民にはなかなか高価で利用できなかった民間旅客機に搭乗して，プロペラ機の窓際の窓から空中写真を自らのコンパクトカメラで目をこらして撮影している。もちろんそれまでに何度も5万分の一の国土地理院の地形図を熟読し，かつ土地利用を色分けしているからこそなせる技であった。そのため，けっして鮮明な画像ではないが，宮本自身が見たものだけを著書に挿入していることが特徴となっている。宮本の景観論の真髄は，本書で何度も言及しているように「人文景観」，つまり人間かがつくった景観 man–made landscape にある。人間の技術の投影や社会のあり方を景観によみとる[3)]。

志賀重昂の日本風景論以来，原生的自然，男性的自然の美がもてはやされた明治後期の状況が，小西にも継承されている。小西の場合は，「日露戦争に勝利した当時の日本の海外進出に，清濁併せ呑む姿勢でとりくむべき心構えを説く。小西は瀬戸内海を南日本の中心，日本文化の揺籃の地ととらえその景観保全や観光開発を推進する一方で，それに拘泥せずに海洋進出やグローバル，ローカルの両面を強調する地域論であり，地政学論」と私は評した（野間2017：168）。

宮本は島嶼・集落の景観類型と生業・社会のあり方の連関から島嶼定住の歴史をたどった。土地制約がきびしく格差や差別もあるなか，人口稠密社会の解消や生活向上のための方策をフィールドから考え，住民参加型の地域おこしや地産地消をいち早く実践した。生誕地の周防大島ではその精神が活かされた地域振興が今も光輝は放つ。

3．瀬戸内海島嶼の地域類型と発展の道筋

瀬戸内海は日本で唯一の地中海で，世界の多島海のなかでもひじょうに風光明媚な内海として，16世紀以降の西洋人に絶賛されてきた。多くの島嶼は古代・中世以来多くの史書にもあらわれ，重要な港津が本州，四国沿岸や内海の

島嶼に点在している。とりわけ山陽鉄道が沿岸に沿って開通するまでは，大坂を起点とする交通・流通ネットワークの大動脈として機能してきた。その全体像を『瀬戸内海の研究』では，島嶼に限定して，いわば海から周辺（中国地方や四国地方の本土）を関係づけるが，あくまでも考察の対象島嶼が中心である。この視点は，前稿で扱った小西和の例とは大きく異なる。

総論の冒頭では以下のように島嶼の性格を概括する。これは島の中世的，あるいは原初的世界を素描したものとなる。

瀬戸内海に浮かぶ無数の島々は地質時代の第三紀から洪積の初めにかけて行われた地塊運動に際し，無数の断層によって塊裂を生じ，その後の沈水運動によってその地塁の部分が水面上に残ったものだといわれており，花崗岩を基盤にして，その上に安山岩や集塊岩をのせているものもあるが，花崗岩の島では一般に急峻な主峯を持ち，その周囲に緩斜面の山裾を持って海に至っている。この緩斜面はいわゆる扇状地といわれるものとは趣を異にし，岩盤の上に堆積する土壌はきわめて浅く，かつ砂壌土で，したがって旱魃にきわめて弱く，多くの場合水田としては利用し難く，畑地して耕作されている。住居はもとこの緩斜面に散在し，いわゆる山麓集落を形成していたのであるが，江戸時代中期以降これらの住居は漸次海岸におりて密集部落を作るに至った。海賊略奪の危険がなくなったためであると言われている。一方海岸からこの斜面に上がっていた人たちもあった。もと上ゲ浜製塩に従っていた人々である。その初め海岸の砂浜に海水を撒布して日干し，その砂を集め，砂に固着した塩分をさらに塩水をかけて落とし，濃縮塩水を得てこれを煮詰め塩を得る方法である。これには多くの燃料を必要とし付近の木を伐ってこれに当てたがその後の一部分が農地として開かれていったのである。谷間平地を持つものもある。このような場合には，そこは湧水や谷川を利用して水田がひらけてくる。

そして多くの島々の開発には最初から農耕を必要としたものと農耕以外を主業としたものとの二つのタイプがあった（宮本 1965：11-12）。

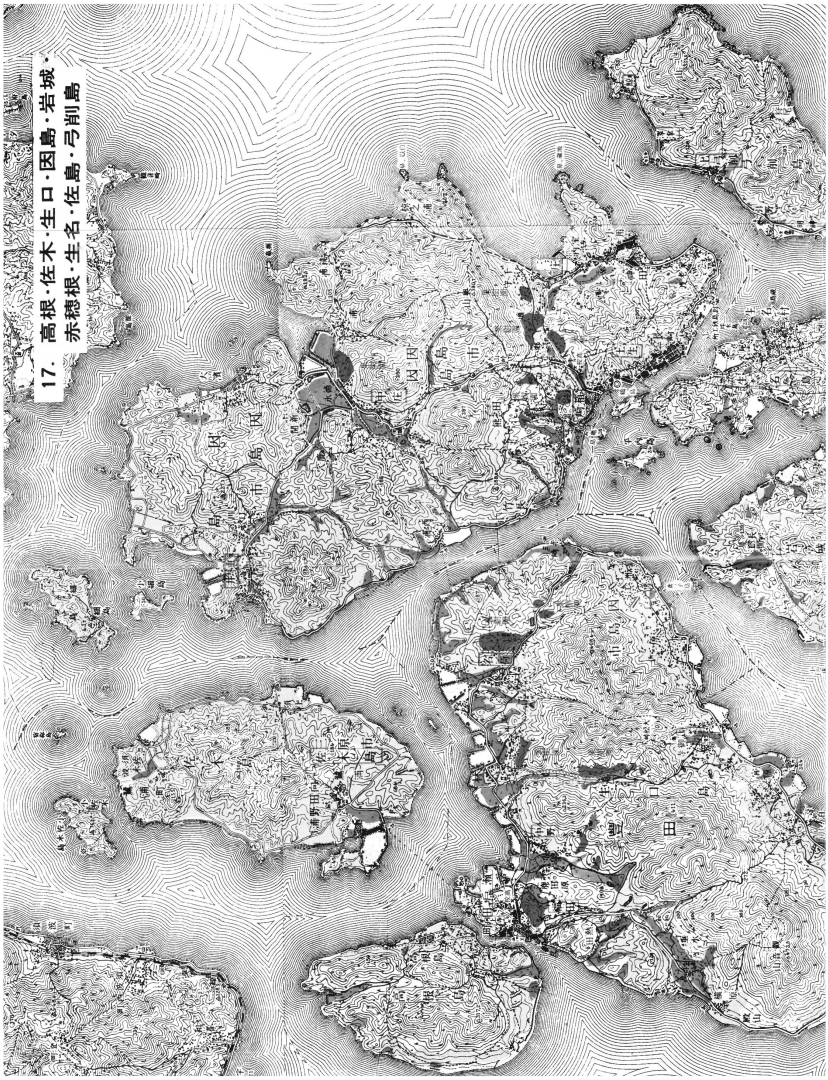

図 1　宮本常一（1965）による芸予海峡の島嶼の土地利用

表３　瀬戸内島嶼の海からみた地域類型

	A. 水田主	B. 畑作と水田	C. 畑作主	D. 農＋漁業	E. 船着場	F. 採石	G. 牧場
事例	淡路島，周防大島西部	伊予中島（忽那島），倉橋島，能美島，両蒲刈島，大三島，越智島，伯方島，生口島，因島，小豆島	平郡島，二神島，津和地島，怒和島，野忽那島，鹿島（倉橋島の属島），桂島，佐木島，弓削島，岩城島，田島，横島，神ノ島，白石島，北木島，真鍋島，塩飽諸島，雌雄島家島	１）久賀・安下浦，（周防大島），瀬戸町（倉橋島） ２）三之瀬（下蒲刈島），福田浦（生口島瀬戸田），箱崎（因島土生），鹿ノ川（能美島），二窓・能地（夜漁），三ノ瀬，鹿老渡，沖家室，安芸豊島，祝島	周防大島，能美島，大崎上島，大三島，伯太島，兵庫（倉橋島），鞆（船釘），上関，地家室，鹿老渡，三ノ瀬，御手洗，鮴，瀬戸田，伊予安居島，岩城島，弓削島，白石島，大多府島	周防大津島，黒髪島，浮島，安芸大黒島，倉橋島，北木島，白石島，小与島，小豆島，播磨男鹿島	１）祝島，八島，平郡島，忽那島，女木島，小豆島，淡路島 ２）家島，鹿久居島，六口島，安芸生野島，大情島
構築物	谷筋，ため池				木綿帆船の発達	塩田，新田造成，防波堤，石垣築造	
地質・地形	安山岩，丘陵	傾斜地，丘陵	傾斜地	沿岸	沿岸	花崗岩	
景観	棚田，平地水田	農地開発，海人の陸上がり，製塩	男のタイ網，イワシ網漁従事，女の陸上がり（cf. 捕鯨）	小規模漁業＝家船（夜漁：船居住/非船居住），昼漁：非船居住）	ガンギ，遊郭，問屋倉庫，造船所，	石材による景観，島嶼人口異常増加	畑の広範な分布，馬の放牧，牛放牧（非役牛）
特色，亜類型	畑地の水田化	１）畑地の樹園地化 ２）主穀型	１）上浜製塩 ２）漁船の商船化 ３）水夫舸子浦漁民の定住 ４）大規模漁業の発達（家船の網子化）	１）漁業集落中央，周辺に商人町付加 ２）在来集落に漁業集落付加	廻船船着場（町場）		１）島民利用 ２）藩牧＝馬 ３）牛放牧
形状	大きな島	島嶼面積中位	小さな島	漁港	廻船寄港地	生活条件劣悪	小さな無人島

図２　塩飽本島勤番所
（2019年７月野間撮影）

第二編は「近世への展開」として，瀬戸内海沿岸の物資と人の流れを近世・近代を中心に素描した後，帆船の航路が古代は地乗りという沿岸の港を結ぶネットワークであったのが，航海技術の発達，船の技術革新によって，「沖乗り」といわれる瀬戸内海の島嶼を結ぶ最短経路がとられるようになり，多くの風待ち，潮待ち港が島嶼部に誕生した。その一方で，同じ島嶼でも傾斜地農業に特化した集落，特異な漁業技術をもった漁村，採石を生業とする集落，造船・船大工に特化する集落などが混在する。現在は典型的な高齢化・過疎の島となっているが，いずれもある時期にはきわめて高い人口密度と経済的活力をもっていた。塩飽諸島，とりわけ本島は優れた航海術をもち，塩飽水軍として活躍。のちには舟子（船員）として活躍した（図２）。その造船技術は現在では岡山県内の神社建築の宮大工技術に継承されている。

図１は瀬戸内海のほぼ真ん中に位置する芸予諸島を中心にした島嶼の５万分の１地形図に赤・薄赤で着色したものである。濃い色調が水田，他が畑地である。宮本にとってまずもって島嶼景観の考察の出発点はこの地形図の“着色”であった。

さらにそれらの基礎作業のうえで総観的な景観類型としてあげたのが表３のA～G７つの類型である。これは宮本の主著（1965）から私がいくつかの項目を設定してまとめたものである。その地域的性格を耕地形態，集落景観，人口構成と人口流動，植生・土地利用の変化，社会組織の類型化から代表的タイプに分類する。そのうち，ミカンに特化した農業集落と，海上交通に関わる集落の差違と，集落維持のための持続的戦略を比較検討する。

土地制約がきびしく格差も差別もある瀬戸内海の島嶼地域のなかで，宮本は人口稠密社会の解消や生活向上のための方策をフィールドから考えていった。いまでいう「住民参加型の地域おこし」の走りでもある。

それは“うち”にとどまることなく，外部に積極的にアピールするもので，地産地消という言葉がなかった時代にその実践の原型を生みだしている。この

方向は晩年により鮮明となり全国離島振興協議会の雑誌『しま』でくり返し持続的な開発を主張している（宮本常一 2010，2018a）。

さらに宮本は未完に終わるがこの研究の「その二」では近・現代の展開を考えていたであろう。「農地を中心とした産業開発やそれが村落構造にどのような影響を及ぼしたかという問題に触れることは少なかったし，また海人（漁民）定住につながる現在の漁村構造に触れることもほとんどなかったけれども，問題を歴史の中に見つつもたえずそれが現在にどうつながるかを見ようとしてきた。と同時に，島嶼社会の特性と言うべき交換経済の発達，異姓（非血縁）集団の発達に伴う平等性と階層性，島社会の限定性から起こる問題を島外による処理，政治圏外逸出に伴うフロンティアの形成についてやや深く触れることができたかと思う。」（宮本 1965：711）は，史料ありきの史学の立場ではなく，現在まで結びつける姿勢が鮮明であったといえよう。さらに「その三」では内海のもつ文化特性について論じるはずであった（宮本 1965：711）。

その一端は，刊行年では前後するが，愛媛大学で開催された日本民族学会の記念講演で披露されている（表４）。とりわけ２の「海人の歴史」の部分こそが，宮本が体系化したかった瀬戸内海島嶼の「本質」であろう。

宮本の直系の弟子といえる田村善次郎は，宮本の没後も，地味で苦労も多い

表４　宮本常一「瀬戸内海文化の基盤」（1962）の章構成

章　構　成
１．地理的景観の歴史性
１）第一次村から第二次村へ ２）整形均分開墾かと不整形開墾 ３）耕地分散と割替耕作 ４）段畑と傾斜畑 ５）散村と集村
２．漁民の歴史―その文化と人間関係―
１）海人 ２）漁民定住と漁業権 ３）半農半漁民の生態 ４）結語

宮本のエッセーや小文を編集，刊行している。近年刊行された『瀬戸内文化誌』（2018b）は、主著で書きたりなかった部分や未完の構想を編著の手で復刻しようとしている。田村が「人文景観と民間伝承，それに文献資料を三位一体として実証研究」（宮本 2018b：405）という宮本の研究方法論は，まさに「宮本学」の本質を言いあてている。

注

1）山口県大島郡周防大島町は瀬戸内海で淡路島，小豆島につぐ 3 番目に大きな島嶼で，2014年（平成16年）10月に大島郡の久賀町，大島町，東和町，橘町の 4 町が合併して誕生した。宮本の出生地はそのうちの東和町で，晩年は東和町の若い人を対象にした東和町郷土大学を発足させ，開講記念講演と第 1 回の講義を行った（田村 2004：18）。旧東和町の平野に完成した周防大島文化交流センターは，1984年開設の東和町総合センターを継承したものである。ここに，宮本常一の著作，写真，蔵書が収納されており，そのデーターベースも完成している。なお，宮本の遺稿となって没後に刊行されたのが『東和町誌』（1982）であり，人文景観への宮本の思いが町誌の記述に込められている。

2）大阪民俗談話会は1934年11月に堺市の浜寺公園の海の家で発足した在野の民俗研究団体である。和泉の小谷方明が中心となり，沢田四郎作（大和）・南要（阿波）・桜田勝徳（陸前）・宮本常一（周防）・岩倉市郎（喜界島）・鈴木東一（和泉）・杉浦瓢（河内）の 8 名が創立メンバーである。これが近畿民俗学会に継承される。

3）このような宮本の視点は2001年にこれまで書き連ねたエッセーを集めた『空からの民俗学』（2001）にも顕著であり，最後まで持ち続けてきた信念でもあった。「空から見下ろす地上の風景は私に無限の夢を誘う。工業都市の上をとぶときは，よごれたスモッグにおおわれた中で，コンクリートのビルが画一的な住宅に近代を意識し，それを誇り，喜びながら生活している人々びとの姿を想像し，青い大海の中に浮かぶ島に人家を見出すと「どうしてこのような島に住み着いたのだろう。そしてどういう生活を立てているのだろうか」などと考えてみる。（中略）久米島は沖縄島の西方海上に浮かぶ島である。この島は比較的水が豊かで水田も多く，米の収穫も多い。久米島という名前も米の島ということであるが，水田ばかりでなく畑も広い。もとはその畑にサツマイモを作り，アワを植え，またサトウキビを植えていたが，今はほとんどサトウキビとパイナップルのようである。それがいろいろの形の畑に植えられている。ひとつとして同じ形の畑はない。そこに地形とひらいた人の意志を読み取ることができる。丸い畑があり，四角な畑があり，三角の畑がある。畑一枚一枚の広さはそんなに大きくない。どうしてこのような畑が開かれたのであろうか（宮本 2001：6）。もとは『翼の王国』という全日空の機

内誌（1979年10月号）に書かれたものである。この文のあとに，琉球列島に鉄の産出がなく，入手は中国との交易しかなかったことから，ヘラという刃先にわずかばかりの鉄が用いられた幼稚な農具で，ひとそれぞれが思い思いに風化した珊瑚礁を砕いた結果，浅耕しかできず地力も弱い。ヘラで砕けないものは畑の農具での開畑であったから，畑の畦に積むか，持ち帰って家回りの石垣にしたと宮本は推測している。

文　献

佐野眞一（1996）：『旅する巨人　宮本常一と渋沢敬三』文藝春秋.
佐野眞一（2003）：『宮本常一のまなざし』みずのわ出版.
板野　徹（2012）：『フィールドワークの戦後史―宮本常一と九学会連合―』吉川弘文館.
小西　和（1911）：『瀬戸内海論』，文曾堂書店（『明治後期産業発達史資料　第210～212巻』，龍渓書舎，1994）　*本文の現代訳あり『口訳瀬戸内海論 上・下巻』，海南文庫顕彰会，1997・1998.
西田正憲（1999）：『瀬戸内海の発見―意味の風景から視覚の風景へ―』，中央公論社.
津森　明（1999）：小西和の景観論」，高松大学紀要，第32号，157-162頁.
田村善次郎（2004）：「宮本常一略年譜」（『宮本常一・同時代の証言』（続編）所収）.
関西大学地理学・地域環境学教室編（2012）：『広島県　呉市・芸南諸島の地理』，関西大学地理学・地域環境学教室.
野間晴雄（2017）：「小西和の瀬戸内海論のまなざし」，關西大學文學論集，第67巻第３号，157-178.
宮本常一（1962）：「瀬戸内海文化の基盤」，民族学研究，26（４），237-257.
宮本常一（1965）：『瀬戸内海の研究（一）島嶼の開発その社会形成―海人の定住を中心に』未来社.
宮本常一（1993）：『民俗学の旅』講談社.（初版は1978，文藝春秋社より刊行）
宮本常一（1995）：『日本の村・海をひらいた人々』筑摩書房.
宮本常一（1997）：『周防大島民俗誌（宮本常一著作集40）』未来社.
宮本常一（2001）：『空からの民俗学』岩波書店.
宮本常一（2010）：『ふるさとの島にありて思う/島と文化伝承（宮本常一離島論集第５巻）』みずのわ出版（全国離島振興協議会，財団法人日本離島センター，周防大島文化交流センター）.
宮本常一（2018a）：『離島振興は進んでいるか/離島青年会議に寄せて（宮本常一離島論集別巻）』，みずのわ出版（全国離島振興協議会，財団法人日本離島センター，周防大島文化交流センター）.
宮本常一（2018b）：『瀬戸内文化誌』八坂書房.

［付記］
本稿は最初，日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）「環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」課題番号22242028，研究代表者：野間晴雄，2012年２月13日愛知県知多郡南知多町師崎）で話題提供をした。その発想の源泉は関西大学地理学・地域環境学教室（2012）で実施した呉市・芸南諸島での実習調査である。それらをもとに2013年７月に，京都市で開催された国際地理学連合（IGU）京都会議で，“Regional characteristics of Seto Inland Sea and its attached islands: network and insularity from eco-historical perspective”として発表した。その後，「近世における島嶼農耕空間と農法の含意―瀬戸内海の島嶼を中心に―」人文地理学会第137回歴史地理研究部会（広島大学，2014年11月９日），さらには，「３つの瀬戸内論の来し方・行く末―小西 和，宮本常一，河野通博―」として，人文地理学会第286回例会（特別例会）・地域地理学会2017年大会（岡山大学）でさらに論を展開して発表した。本稿はこのうちで，宮本常一の瀬戸内島嶼研究の主要部分を論じたものである。このような数年にわたる期間の異なる場でさまざまなコメントをいただいた方々にお礼を述べたい。

キーワード：瀬戸内海，宮本常一，景観均分相続，海人，地域開発，半農半漁